

修学旅行の京都から その5

修学旅行という非日常が、やがて帰りのスーパーひたちの中で、溶けていき、日常の時間が回りだす。こんなにも、楽しかった思い出が、まさしく思い出に代わっていくのである。子供のころの夏休みの最終日、大学時代の卒業式、転勤する3月31日の夜。

過ぎ去っていくときの流れを振り払いながら、日常の今を選択していくことを決意する瞬間が訪れる。

京都の歌は、恋の歌が多い。それも別れの曲が多い。歌を歌って。懐かしんでいたのはその日まで。これからは、また毎日の中でどうすれば一番良いのだろうかというあがきの繰り返しという日常の生活に戻るのだ。

何をいまさらといわれようが、そうするしかないのだから歩き出すしかない。

しかし、来年の3月31日には、次の日を考えることがあるのだろうか。ずっと非日常が続くとしたら、いったい何を思い何をし始めるのか。

その時のことはもう考えてている。何もすることがなかったとしたら、きっと、バックパッカーとなって旅に出る。

(バックパッカー(英語: backpacker)とは、低予算で国外を個人旅行する旅行者のこと。バックパック(リュックサック)を背負って移動する者が多いことから、この名が付けられた。)

ひたすら、ポルトガルのリスボン近郊サンタクルスという漁村を目指してみたい。檀一雄の住んだこの村で、大西洋の風と太陽の光をじかに感じてみたいと思う。

その日をひたすら恋焦がれながら、せつせと校長便りを書き上げなければならない。

『落日を拾ひに行かむ海の果』

The monument of DAN Kazuo who was a famous writer.

Perhaps it says I'm going to go to the end of the sea to catch the sunset.

ポルトガルサンタクルスにある檀一雄の句碑

『落日を拾ひに行かむ海の果』とは、ポルトガルのサンタクルスに落ちていく、太陽の姿を見つめる沈黙の時が、私の中に訪れるということである。